

●●講中を訪ねて●●

東松山市 東平御嶽講中

ひがしいら。

講元 柳澤 満

私が小さい頃、毎年冬になると「ミタケのダンナ」という白髪で豊饒とした方が三晩から四晩泊りに来ました。ダンナは大きな箱にお札を入れ、それを風呂敷で包み、背負って講中の家々を回りお札を納めていました。現在は東平自治会館に講中の者が集まり、北島御師さんを迎え家内安全等を願って祭祀を執り行いお札をいただいております。

東平御嶽講は、八十軒を超える規模でしたが、現在は三十数軒となっております。東平は耕作地の少ない集落でしたが、最近は特に宅地化が進み、ますます耕地は少なくなっております。講中の中に数軒の梨栽培を営む方がおりましたが、今は地区内二十軒が増え、梨の里「東平の梨」とPRして、秋の収穫期には大勢のお客様が梨狩りなどを楽しんでおります。



講中の課題は、長い間講中の皆様と御嶽神社に参拝してないので、早い時期に実現したいと考えております。

主幹 宮司 北島 泰年
所在地 埼玉県東松山市
所 在 地 埼玉県東松山市
講 員 数 約三十名

●●所沢市 下安松愛宕山御嶽講中●●

講元 森田 道昭

私達の所沢市は、首都圏三十キロメートルに位置し、「トトロの森」がある狭山丘陵や武蔵野の雑木林に代表される豊かな緑、桜の名所としても名高い狭山湖や航空記念公園など、すばらしい自然環境と都市機能とが調和した美しい街です。

西武池袋線と同新宿線の交差する所沢駅は、都心と西武蔵地方と結ぶ重要な拠点です。一日十万人が、往き来する駅前の光景は都心と全く変わらない。駅東口には西武鉄道の本社もあり、西口には西武百貨店があり、現在も駅構内増築工事も行われています。平成二十三年には日本最初の飛行場が開設されてから百周年という記念すべき年を迎えました。

さて御嶽講ですが、講ではなく農家組合として毎年御嶽参りをしておりまして、平成九年原島征四郎宮司さんより講の設立指導を頂き、私の先代講元 森田祐夫が平成の御嶽講として、下安松愛宕山講を設立いたしました。

毎年三月の上旬には、自治会館にて総会を開催し、宮司さんのご臨席を頂き講員との交流会を年中行事としております。当日は講員の手打ちうどん作りをして

おります。宮司様より神札の「大口真神」「盗難除け」「御嶽神社火難除」等のご説明を頂いております。五月の日の出祭には、鎧武者を講員が代表して数人が参加したこともあり、また、白丁を講員が代表して神輿行列に参加した経験もあり、七月の講員全員参拝、九月の薪神楽も毎年一泊で参加し、日本人が神と共に楽しんで神楽を幻想的なかがり火の中で楽しんでます。毎年十一月頃、はらしま会の講の総会には一泊して会席料理を楽しんでいます。終わりに武蔵御嶽神社の益々のご隆盛と原島宮司家のご繁栄をお祈り申し上げます。

主幹 宮司 原島 一臣
所在地 埼玉県所沢市
講 員 数 二十九名



第四十三回 武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数 三百七十九句

選者 岡田 日郎

特選

- 一席 河鹿鳴く溪の深さや御師の宿 青梅市 原島 康典
- 二席 苔生ふる茅葺き屋根に百合の花 新座市 長谷川 崇
- 三席 鹿鳴いて御師集落の夜明けかな 武蔵野市 内藤 由紀
- 四席 佳き神籤結ぶ枝木の芽ほころぶる 多摩市 橋 本 絢
- 五席 朝靄の山路落葉の湿りけり 青梅市 津布久 信雄

秀逸

- 蝦蟇出づる石垣高し御師の宿 相模原市 関 迪 子
- 御師の宿月光浴びて点在す 松戸市 林 民 江
- 秋冷といふ一山の霊気かな 立川市 日置 正樹
- 秋涼の深まりゆきて山の雨 さいたま市 土肥 寛子
- 蕪草履吊るすお店や零余子飯 久喜市 大澤 君子
- 大前の祝詞に混じり法師蟬 多摩市 萩生田 芳孝
- 遠くまで神楽の聴こえおぼろ月 調布市 松 繁
- 茅葺根に新雪を積み御師の家 藤沢市 本田 真紀子
- 御岳道むささびの声間に聞く 杉並区 兵頭 昌子
- 大根干し御師宿坊の一むしる 羽村市 小澤 弘子

佳作

- 宿坊にうぐひす鳴きて神の山上 尾市 高野 利幸
- 御師の踊り神楽の大蛇退治され 所沢市 遠藤 康雄
- 鶯の声に目覚めて御師の宿 多摩市 立川 明朗
- 全山を覆ひ尽くして蟬しぐれ 羽村市 杉原 功一郎
- 水引の覆ひ隠して歎道 国立市 大貫 葉子
- 宿坊に一夜の宿り星令宵 中野区 辰巳 行雄
- 多摩川へ御嶽神社の煤払ふ 日の出町 渡邊 敏雄
- 大瑠璃の声鳴き渡り御岳山 松戸市 鈴木 恵子
- 山上に神と拝して初日の出 横浜市 碓 賢 史
- 御師の宿茅葺き屋根や晩夏光 中野区 中村 誓子

選者 吟 春暁の雲に埋もれて御師が里

奉納俳句選評

特選一席

河鹿鳴く溪の深さや御師の宿 原島 康典
「河鹿」川かじか。水のきれいな溪流に棲む蛙。昼間でもよく鳴くが、ことに目暮れどき一匹が鳴き出すと、一勢に鳴き出すようなこともある。「御師の宿」だからこそ聞くこともあるに違いない。

特選二席

苔生ふる茅葺き屋根に百合の花 長谷川 崇
「茅葺き屋根」は古くになると「苔」はじめ、さまざまな植物が生えてくる。「百合の花」が咲くようになっては麓屋に近いかもしれない。実際に見たからこそ一句ができたのであろう。

特選三席

鹿鳴いて御師集落の夜明けかな 内藤 由紀
鹿は一年中山では見かけるので、鹿だけでは無季である。鹿の声が秋の季節である。「御師集落」の一軒宿泊して「夜明」にその声を聞いた。生涯忘れられることはあるまい。

特選四席

佳き神籤結ぶ枝の芽ほころぶ 橋 本 絢
「佳き神籤」とある。大吉など引き当てたのに違いない。「木の芽」吹きのか「枝」に「結ぶ」というところが俳句表現のポイントといっている。

特選五席

朝靄の山路落葉の湿りけり 津布久 信雄
山地の季節の移り変わりは千変万化である。「朝靄」に包まれ「落葉」の降り積もった「山路」も日もある。「湿り」と感じ取ったことよって一句が成立した。一般の登山者とは違うところでもあり、おだやかな表現でいい。

第四十四回 奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る
 - 一、受付は指定用紙にて投句箱へとする（郵送等直接の受付は致しません）
 - 一、締切り 平成二十九年一月十五日
 - 一、発表 平成二十九年三月中旬
- 四季を通じ「御岳山を題材」とした俳句を募集しております。大勢の方の投句をお待ちしております。

お 岡田 日郎

昭和七年十一月三日生まれ。福田蓼汀(りょうてい)の「山火(やまび)」に投句し、昭和二十六年から編集を担当、蓼汀没後の平成二年主宰となる。山と自然を称える山岳俳句を多く詠み、五年「連嶺」で俳人協会賞。東京出身。学習院大卒。本名は晃。著作に「山の俳句歳時記」など。